

太田野歩
たこ

準グランプリ

2013年
第19回 函館港イルミネーション映画祭
第17回シナリオ大賞受賞作品



【作者プロフィール】

おおたのつぼ

本名、太田弘一、東京都出身、千葉県在住、59歳。

2011年に34年間勤めた電気メーカーを退職後フリー。

2012年第18回函館港イルミネーション映画祭・第16回シナリオ大賞で最終選考に残り、その気になってシナリオ創作を継続中。

【あらすじ】

北海道開拓の労働力を担ったのは、囚人、屯田兵、そして「たこ」と呼ばれる奴隷の様な拘禁労働者達でした。「たこ」は、働कि盛りの男達が人身売買によって集められ、たこ部屋と呼ばれる飯場に拘禁されて、一日十四・五時間劣悪な環境で働かされました。この人権を無視した「たこ部屋制度」は明治後半から太平洋戦争敗戦まで続けますが、国も民衆も必要悪として黙認し続けました。

このたこ部屋に「たこ」を供給したのが、前借金を口実に周旋という名の人身売買を生業とした周旋屋です。明治後半から大正にかけて、当時日本一の規模の周旋屋が函館にあり、大沼平五郎という男が営んでい

ました。平五郎は真砂町に店を構え、東京、大阪、神戸に支店を出し、一代で七・八十万円の財（現代価値で数十億）を成したと言われています。

この規模になると、周旋屋と言えどもこの時代では立派な事業家です。しかし、周旋屋という生業が忌み嫌われ、函館の旦那衆からは外され、表の歴史には名が残っていません。

この物語は、大正の初めの大沼平五郎（作中は大沼大五郎）をモデルにして、当時の「たこ部屋制度」に翻弄されていく人々を描いたものです。

平沼大五郎には東京の妾に産ませた一人娘の千代子がありました。大五郎は千代子を可愛がり、東京の高等女学校にまで行かせ、

女学校卒業後には函館に呼び寄せます。平沼の娘として函館から嫁に出したかったのです。

大五郎は千代子に、自分の仕事を隠していましたが、それがあだとなります。函館の千代子に会いに行く為に、千代子の恋人の武雄は、北海道での仕事を探しますが、千代子は武雄に大五郎の店の利用を勧めてしまいます。しかし、武雄が大五郎の店で周旋されたのは鉄道工事のたこ部屋でした。そうして、大五郎、千代子、武雄は、それぞれの思いとは異なる方向へ、運命に流されていきます。

【登場人物】

平沼千代子 (十八歳)

平沼大五郎 千代子の父 (六十二歳)

平沼八重 千代子の母 (四十五歳)

カネ 下女 (婆や) (六十歳)

高橋ハル 千代子の学友 (十八歳)

高橋茂 ハルの兄 (二十一歳)

高橋絹江 ハルの母 (四十七歳)

沢村武雄 茂の学友 (二十一歳)

中山康介 武雄の学友 (二十一歳)

池田修二郎 池田家次男 (二十七歳)

伍助 番頭 (五十五歳)

新五郎 募集係 (六十歳)

初太郎 募集係 (五十歳)

留吉 移送係 (三十二歳)

直治 移送係 (二十六歳)

親方 飯場親方 (五十歳) 巡查B (大正時代) (二十五歳)

帳場係 飯場帳場係 (三十歳) 車夫 (三十五歳)

炊事係 飯場炊事係 (六十五歳) 車掌 (二十八歳)

権三 飯場棒頭 (三十五歳) 馭者 (六十歳)

定次 飯場棒頭 (三十二歳)

清吉 飯場棒頭 (二十八歳)

久弥 飯場棒頭 (三十八歳)

亀八 飛びつちよ (三十五歳)

京四郎 飛びつちよ (三十二歳)

女将 遊郭「春日楼」女将 (四十五歳)

警察官 (平成時代) (三十二歳)

老婆 (七十歳)

若者A (十九歳)

若者B (十九歳)

若者C (十九歳)

巡查A (大正時代) (三十八歳)

○胆振線廃線跡 軽川トンネル

入口をコンクリートで閉ざされた軽川トンネルが藪の向こうに見える。

トンネルの手前の斜面は、土砂崩れが発生していて、草木がなぎ倒され、土がむき出しになっている。

藪の中から、三人の若者が出て来る。

若者は皆ハイキングスタイル。

若者A 「おおっ、軽川トンネルが見えたぞ」

若者B 「やばい、土砂崩れだ」

若者C 「ほんとだ、一昨日の台風だな」

若者A 「大丈夫だよ、もう崩れんだろう。

トンネルの入り口まで行ってみようや」

若者Aは、崩れた斜面を横切ろうと

する。

若者B 「大丈夫かよ」

若者Bと若者Cも若者Aに続く。

土の斜面に、ラグビーボールの大きさの土の固まりが数個転がっている。

若者Aが、その土の固まりを拾い上げてみると、表面の土が剥がれて中から髑髏が出て来る。

若者A 「わっ、骸骨だ」

若者Aは、拾った土の固まりを放りだす。

若者Bが、別の土の固まりを拾い上げる。

これも、髑髏である。

若者B 「おい、やばいよ、人骨だらけだ」

若者Aが、焦って戻ろうとすると、

ぬかるんだ泥に足を取られて転ぶ。

若者Aが、立ち上がるうとして地面を掴むと、そこから大腿骨が出てくる。

若者三人は、『わあゝつ』と大声を上げて、歩いて来た方角に逃げ戻る。

○警察派出所 中

警察官と老婆がいる。

老婆が背負い籠の中からトウモロコシを取り出して、机の上に並べる。

警察官「婆ちゃん、いつもすまんね」

老婆「んにゃ、一人じゃ食べきれんから」

○バス道路

泥だらけの三人の若者が走って来る。

三人共に、驚愕の表情をしている。

○警察派出所 中

三人の若者が飛び込んで来る。

警察官と老婆が驚いて三人を見る。

若者A「おまわりさん、大変だ」

警察官「どうした、そんなに慌てて」

若者A「軽川トンネルに、人骨が沢山散らばってます」

警察官「軽川トンネルって・・・」

若者B「胆振線の廃線跡です」

警察官「さあ、三人共少し落ち着いて・・・」

君達はどこから来たんだ」

若者A「五稜郭大学の学生です。鉄道研究会で、胆振線の廃線跡を見に来たんです

が」

警察官「で、軽川トンネルがどうしたって」

若者C「この先の山ん中にある、昔のトンネルです」

若者B「トンネルの前の斜面に土砂崩れが起きてて、そこに人骨が沢山散らばってるんです」

警察官「人骨、・・・死体じゃないんだね」

若者B「髑髏や、足の骨が泥の中に・・・」

老婆「そりゃ、たこだわ」

警察官が老婆を怪訝な顔で見てる。

警察官「えっ、たこ・・・」

○メインタイトル 『たこ』

○千代子の家 居間 朝

千代子と母の八重が朝食を食べている。

下女のカネが給仕をしている。

千代子は女学校に登校する服装で、足元に勉強道具を入れた風呂敷包がある。

八重「早くしないと遅れるよ」

千代子「帰りにハルさんとこ寄ってくるから」

八重「またかい、そんなにしょっちゅうじゃ、

あちらさんもご迷惑だよ。・・・今日はお

父さんが来るんだからね、早くお帰りよ」

千代子「わかってます」

千代子は食べ終えて、風呂敷包を持って出かけようとする。

大正七年二月 東京 下谷

カネ「千代さん、お弁当」

千代子「あつ、いけない」

千代子はカネが渡してくれた弁当を、

風呂敷包に包んで、慌てて出て行く。

八重が千代子の背に声をかける。

八重「遅くなるんじゃないよ」

○女学校の校門 下校時間

女学生がぞろぞろと校門から出て来る。

千代子と高橋ハルも校門から出て来る。

校門の外に、ハルのお迎え用の人力

車が待っていて、車夫が二人に頭を

下げる。

車夫「お帰りなさいまし、今日もお二人で」

ハル「お願いします」

千代子とハルは、一人乗り用の人力

車に二人で乗り込む。

車夫「ようがすかい」

車夫が二人に笑いながら声をかけ、

人力車を引き走り出す。

○ハルの家 二階のハルの部屋

高橋ハルの家は二階建ての洋館の邸宅。

ハルは窓辺で外を眺め、千代子はハルの書棚で本を選んでいる。

千代子「これ、借りてもいい」

ハル「そこのは、どれでも良くつてよ。・・・

千代子さんは、卒業したらどうなさるの」

千代子「きつと、お見合いさせられて、お

嫁に行かなきゃなんないわ・・・」

ハル「だめ、だめ、絶対だめ。武雄さんが卒業するまで、待っててあげなきゃだめよ」

千代子「でも、・・・うちは、お父さんの言

う事が絶対だから・・・。無理だわ」

ハル「そんなのだめよ。お見合いさせられそうになったら、ここに逃げたらっしやい。私が匿ってあげるわ。あつ、帰ってらした」

ハルが窓外に向かって手を振る。

○ハルの家 外

門からハルの兄高橋茂と、茂の友人の沢村武雄が歩いて来る。

二人は、剣道の稽古の帰りで、稽古

着姿。

二人は、二階の窓から手を振るハルに気付いて、手を振りかえす。

○ハルの家 二階のハルの部屋

窓辺にいたハルが千代子の所に駆け寄り。

ハル「さあ、迎えに行きましょう」

ハルが千代子の手を引き、二人は部屋を走り出て行く。

○ハルの家 階段

ハルと千代子が駆け下りて来る。

○ハルの家 裏庭 井戸端

茂と武雄が剣道着を脱ぎ、禪一つの

姿で水を浴びている。

武雄はいい体格をしている。

茂「うひゃ、冷てえっ」

武雄「こりゃ、風邪ひくぞ」

ハルと千代子が裏口から飛び出して来る。二人は、茂と武雄の禪一つの姿を見て驚き、『わあっ』と言って慌てて裏口に引つ込む。

茂と武雄は、ハルと千代子の行動を見て大笑いする。

○ハルの家 居間（洋間）

ハル、千代子、茂、武雄の四人がテーブルを囲んでケーキを食べている。

茂「卒業式は何日だっけ」

ハル「お兄様、もう忘れたの。この間お話

したばかりよ。三月二十四日です」

茂「よし、その日は皆で写真を撮ろう」

武雄「えっ、写真館に行くのか」

茂「違うよ、ほら親父のカメラ借りてさ、ここで皆で写すんだ」

ハル「わあっ、賛成。学校の記念写真なんかよりずっと楽しそう。ねえ、千代子さんも武雄さんも来れるでしょ」

武雄「僕はその日もきつと稽古に来るから」
ハル「千代子さんは」

千代子「・・・母さんに話してみる」

ハル「絶対来なきやだめよ。卒業式の後、無理やりでも拉致しちゃうから、良くって」

茂「おい武雄、千代子さんの写真を手に入るチャンスだぞ」

茂とハルは大笑いし、武雄と千代子は恥ずかしそうに下を向く。

○千代子の家 外 夕刻

人力車が来て、家の前に止まる。

平沼大五郎が降りて、千代子の家に入る。

大五郎は和服にとんびをはおり、ハンチングを被っている。

○千代子の家 玄関 夕刻

大五郎が入って来る。

大五郎「帰ったぞ」

八重とカネが奥から慌てて出て来る。

八重「お帰りなさいまし。上野のお店に寄ってらしたんですか」

大五郎「いや、大阪から直接帰ってきた」

八重「それではお疲れでしょう。お風呂の用意ができてますから」

大五郎は帽子ととんびを脱いで八重に渡し、勝手知ったる感じで奥に上がる。

八重は帽子ととんびを持って後を追う。

カネは、大五郎の草履を下駄箱に仕舞い、大五郎の鞆を持って奥に上がる。

○千代子の家 居間 夕刻

大五郎が入って来て、長火鉢の前に座る。

八重が酒と肴を盆に載せて持って来

る。

八重「湯加減いかがでしたか」

大五郎「ああ、・・・千代子はまだか」

八重が、大五郎に酌をしながら。

八重「ええ、今日は女学校のお友達のお宅

に寄ってくるそうで。もう戻るはずす」

大五郎「友達って」

八重「外交官の娘さんで、湯島の大きな洋

館に住んでらっしゃるの。大の親友なん

ですって」

大五郎「湯島の洋館・・・。そんな金持ち

のお嬢さんと親しくしているのかい」

八重「貴方のお蔭です。女学校まで行かせ

ていただき、贅沢させていただいてます

から」

大五郎「今年卒業だったね」

八重「ええ、・・・早いものですね」

大五郎「なあ八重、千代子が卒業したら、

ここ引き払って、皆で函館に来なさい」

八重「えつ、函館って、ご本家にですか」

大五郎「そうだ、・・・登美子が死んで二年

になる。もういいだろう、・・・函館で不

自由してる訳じゃないんだが、宗一郎も

釧路に行かせてしまったし、一人じゃ寂

しくてな」

八重「珍しいわね、随分弱気なこと」

大五郎「後妻として入ってくれないか」

八重「本気なんですか。嬉しいお話ですけど」

大五郎「本気だよ。千代子にも、平沼の娘

として、函館から嫁に出してやりたいし

な」

八重「有難うございます。嬉しくて涙が出

てしまいます」

大五郎「千代子が卒業するのを待ってたんだよ。……五月にでも引つ越して来なさい」

玄関から千代子の声が聞こえる。

千代子の声「ただいま」

八重「遅かったねえ、お父さん、もう来られてますよ」

千代子が来て正座して大五郎に挨拶する。

千代子「お帰りなさい」

大五郎「もうすぐ卒業だね。女学校は楽しかったかい」

千代子「ええ、友達が沢山できて……長い間有難うございました」

八重「さあ、すぐ夕食にするから、早く着替えておいで」

千代子「はい」

千代子が居間を出て行く。

八重「カネさん、もう支度できてるかい」

八重も居間を出て行く。

○千代子の家 居間 夜

大五郎、八重、千代子がカネの給仕で、夕食を食べている。

大五郎「千代子とカネさん、ちょっと聞いてくれ。さつき八重と話したんだが、八重に後妻に入ってもらう事にした。千代子も卒業するし、ここを引き払って函館に来ておくれ。カネさんも、できたら一緒に来ておくれかな。八重も千代子も函館には知り合いがないからね。家族同様のカネさんが一緒に来てくれたら、安心なんだがな」

八重「カネさん、どうかしら」

カネ「もったいないお話です。奥様、おめでとうございます。それを伺っただけで、私も嬉しくて。・・・私は身よりも有りませんから、皆さんがよろしければ、どこへでも」

大五郎「そうかい、それは良かった。千代子には、良い縁談を見つけて、りっぱな婚礼をあげてやる」

千代子は大五郎の話聞いて、気の重い顔で下を向き、黙々と食べている。

八重「千代子は嬉しく無いのかい」

千代子が下を向いたまま小声で答える。

千代子「函館は、知った人が誰もいないし、

友達とも別れなきやならないから・・・」

大五郎「函館は良い所だよ。知り合いもすぐできる。それに、いずれ嫁に行くんだから、ずっとここに居られる訳じゃない」
八重「だから、カネさんも一緒につて、お父さんが気を使つて下さってるんでしょ」
カネ「千代さん、大丈夫ですよ。千代さんの行く所へは、ずっと一緒に付いて行きますから」

カネが笑い、千代子をとりなすが、千代子は浮かぬ顔のまま、下を向いて黙々と食べている。

○高等女学校講堂 中

卒業式が執り行われていて、卒業生の中に千代子とハルの姿もある。

講堂前の広場は、桜が咲き始めている。

卒業式が終わり、卒業証書を手にした女学生とその親達が、講堂から出て来る。

八重と千代子、ハルとハルの母親高橋絹江が、連れだつて出て来る。

八重が絹江に何度も頭を下げながら。

八重「いつも千代子がおじゃまして、お世話をかけました。日を改めまして、

ご挨拶にお伺いいたします」

絹江「いえいえ、私共は何も。千代子さんにお友達になつていただいて、ハルも楽しい学校生活を送ることができました。お礼を申し上げるのは、こちらですわ」

八重「不束な娘が、ハルさんの様なお嬢様と親しくさせていただけただけで光栄です。有難うございました」

絹江「これから宅で、卒業祝いをいたしますの。よろしかったら、ご一緒にいらつしゃいませんか」

八重「とんでもございません。私共の様な者が」

ハル「さあ、千代子さん行きましょう」

ハルが千代子の手を引いて行こうとする。

千代子は八重の顔色を窺い、八重は千代子を睨む。

八重「千代子・・・」

千代子「ハルさんの家で、記念写真を撮る約束なの。写真を撮るだけ。すぐ帰るから」

絹江「ご遠慮無く、一緒にいらしてください」
八重「すいませんね、うちの娘は厚かましくて。写真を撮ったらすぐ帰るんだよ。

皆さんご予定がお有りになるんだから」

絹江「そうおっしゃらずに、お母様も一緒にどうぞいらしてください」

八重「すいません、それでは千代子がおじやましますが、宜しく願いいたします。

私はここで失礼させていただきます。また日を改めましてご挨拶に」

絹江「そうですか、それでは千代子さんをお預かりします。本当にお気遣いなく。ごきげんよう」

絹江は、八重に頭を下げて校門の方に歩いて行く。

ハルと千代子も手を繋いで校門に向

かって走って行く。

八重は三人を講堂の前で見送る。

○ハルの家庭

洋館の前に広がる芝生の庭。

茂が芝生の上に三脚を立て、洋館をバックに、ハルと千代子の写真を撮っている。

武雄は、横でハルと千代子を見ている。

ハルと千代子は、手に卒業証書の入った筒を持って、ポーズを決めている。

茂と武雄は学生服姿。

武雄の学生服は古びている。

ハル「お兄様、ちゃんと撮ってよ」

茂「大丈夫、僕を信じる。はははは・・・」

皆で笑いながら、ポーズを変えて何

枚か写す。

ハル「今度は千代子さんと武雄さんを撮つて」

茂「よし、武雄、千代子さんの横に立てよ」

武雄「えっ、四人で一緒に撮ろうよ」

茂「いいから、いいから、早くしろよ」

武雄と千代子の二人が並んで立つ。

二人は緊張して固い顔つき。

ハルが、嬉しそうに二人を見ながら。

ハル「二人共、ちっとも嬉しそうじゃないわ。

もつと肩の力を抜いて。笑って、笑って」

茂「さあ、ここを見て。鳩が飛び出すよ」

皆が笑う。

○フアインダーに写る千代子と武雄

○ハルの家 居間

ハル、千代子、茂、武雄が入って来る。

ハル「ケーキを食べましょ。座って、座って」

テーブルを囲んで四人が座る。

千代子は、固い顔つきで下を向いている。

ハル「千代子さん、どうしたの。気分でも

悪いの」

茂、武雄も千代子の顔を覗き込む。

千代子、テーブルに突っ伏して泣きだす。

ハル「千代子さん、・・・大丈夫」

千代子は、突っ伏したまま泣き続ける。

茂と武雄は啞然として千代子を見ている。

ハルが千代子の所に駆け寄り、千代子の肩を抱き、千代子にハンカチを渡す。

千代子、漸く顔を上げ、ハンカチで顔を覆いながら、小声で話し始める。

千代子「もう、お別れなの。私、函館に引越すの」

千代子、また突つ伏して泣く。

ハルが千代子の肩を揺すって。

ハル「えっ、そんなのダメよ。函館なんて行っちゃダメ」

武雄は険しい顔で、じっと千代子を見つめている。

茂が慌てて。

茂「ハル、お前までとり乱してどうするんだ。

千代子さん、落ち着いてゆっくり聞かせて。函館に引越すって、いつ……」

千代子「もうすぐ……私が卒業したら父の居る函館に行く事になつてるの。もう、

会えないの。ここにも来れないの……」
ハル「そんなの、ダメダメ」

茂「お父さんは函館にいらっしやるんだ」

メイドがケーキと紅茶を運んで来る。

茂「ハル、ハルも少し落ち着いて……千

代子さんの話をよく聞こうよ」

四人の前にケーキと紅茶が並べられるが、千代子は突つ伏したまま。

ハルは涙目で千代子を睨んでいる。

武雄はじっと千代子を見つめている。

茂は、三人の様子を交互に見て、と

りなそうとするが言葉が出ない。

○不忍池の畔 夕刻

千代子と武雄が、浮かぬ顔で歩いて来る。

武雄が千代子に歩きながら語りかける。

武雄「僕の家は、松本の小さな農家でね、長男だから、本当は継がなきゃならんんだけど、東京に出て来てしまった。．．．だから、茂君達と違って、僕は学費も下宿代も全部自分で稼ぐしかないんだ」

千代子は聞きながら、俯きかげんに歩く。

武雄「毎年、夏の休みにね、沖仲士とか土工の人夫をやって、まとめて稼ぐんだ」

千代子「沖仲士．．．」

武雄「そう、体力には自信があるからね。

沖仲士とか土工人夫は、日雇いだし、日当がいい。まとめて短期で稼ぐには一番なんだ」

千代子「今年の夏もするの」

武雄「ああ、今年は北海道で働こうと思ってる。鉄道工事とか道路工事とか、たくさん有るらしい。北海道で働けば、往き帰りとか、休みをとって、函館に寄れるだろ」

千代子「本当、本当に函館に来れるの」

武雄は立ち止まって千代子の手を取る。

武雄「ああ、必ず函館に会いに行くよ」

千代子は武雄をじっと見つめるが、

声が出ない。

武雄「上野駅前の周旋屋には、北海道の鉄道工事の募集がたくさん出てゐるらしい。

そこで、仕事を探してみるよ」

千代子「上野の周旋屋、・・・それなら父のお店がいいわ。父は仕事の事殆ど話さない人だから、お店の場所も、どんな仕事をしているかも詳しく知らないけど、上野に周旋屋のお店を出しているのは確かよ」

武雄「お父さんは周旋屋か」

千代子「函館で始めて、手広くやってるみたい。だけど、父は自分の仕事を隠してるの。周旋屋って、仕事の斡旋をするんでしょ、何も恥ずかしい仕事じゃ無いわよね」

武雄「周旋屋は利用したこと無いから、僕

も良く判らないけど、お父さんのお店、探して行ってみるよ」

千代子「必ず会いに来てね」

武雄「約束する。手紙も出すよ。だから、もう泣かないでくれよ」

千代子「・・・ごめんさい」

武雄と千代子は手を繋いだまま歩き出す。

○夜行列車 車内 夜

一等車両に、千代子、八重、カネの三人が乗っている。

八重とカネは、千代子の前の座席で眠っている。

千代子は、真っ暗な窓外を眺めている。

○千代子の回想（上野駅ホーム 夕刻）

青森行き夜行列車の前に、千代子、八重、カネが立って居る。

三人を見送りに、十数人の人が来ており、その中にハル、茂、武雄もいる。八重は、見送りに来てくれた人に、順に挨拶して回っている。

千代子とハルは、両手を握り合って離さず、二人共にただ泣いている。

茂がハルに近寄って耳打ちし、ハルは、はつと気付いて、千代子を武雄の前に連れて行き、千代子と武雄の手を繋げる。

千代子と武雄が見つめ合う。

武雄「必ず会いに行く」

千代子が大きく頷く。

発車のベルが鳴り、八重とカネが列車に乗り込む。

八重「千代子、発車するよ」

千代子、列車に駆け込む。

機関車の汽笛が鳴り列車がゆっくり動き出し、千代子はデッキから身を乗り出して手を振る。

ホームで手を振る武雄、ハル、茂が遠ざかって行く。

○夜行列車 車内 夜

千代子は、真つ暗な窓外を眺めている。

前の座席で眠っている八重とカネ。

○千代子の回想（千代子の部屋）

千代子が机に向かつて本を読んでい
る。

八重が、千代子の部屋を覗き。

八重「何してるの、早く荷造りなさい」

千代子「私、函館行かない」

八重「まだそんな事言ってるの。女学校ま
で卒業したんだから、少しは大人の分別
をわきまえなさい」

八重、千代子の部屋に入つて来て座
り。

八重「千代子、ちょっとこっちを向きなさい」

千代子、八重の前に向き直る。

八重「いいかい千代子、あたしだつて函館
に行くのは不安なの。知らない土地で、
まして本家に入つて。．．．芸者上りのあ
たしに何ができると言うの。考えただけ

でぞつとするわ。．．．でもね、これまで
何不自由無い生活させてもらつて、お父
さんにどんな恩返しができると言うの。
あたしは、ずつとお父さんに尽くしてい
くだけ。．．．判るかい。我儘ばかり言つ
てないで、千代子も少し考えてみなさい。
いいね」

八重は千代子の部屋を出て行く。

千代子は机に突つ伏す。

八重に変わつてカネが千代子の部屋
に入つてくる。

カネは、千代子の肩をやさしく抱い
て。

カネ「千代さん、さあ一緒に荷造りしまし
よう。．．．あたしや、千代さんが生まれ
た時から一緒なんですから、ちゃんと千

代さんがお嫁に行くまで一緒に居ますよ」

○夜行列車 車内 夜

千代子は、真つ暗な窓外を眺めている。

カネが目を覚まし。

カネ「千代さん、眠れないんですか」

千代子、首を横に振る。

カネは、手提げ袋の中から煎餅を取り出して、千代子に差し出す。

○函館港

青函連絡船が函館港の棧橋に接岸する。

○函館港 棧橋

下船した船客が棧橋を歩いて来る。

千代子、八重、カネも棧橋を歩いて来る。

○函館駅

大五郎が小僧を連れて迎えに来ていて、棧橋の方から歩いて来る千代子達を見つけて手を振る。

千代子達が大五郎の所に来る。

大五郎「よう来た、よう来た。疲れたろう」
八重「旅なんてしたこと無いもんですか
ら、あなたの顔見て安心したら急に疲れ
が・・・」

大五郎「カネさん大丈夫かい。もうちよつ
とだからね。ここから市電ですぐだから」
八重「市電、函館に市電があるんですか」

大五郎「そうさ、函館はいい街だ。きつと
気に入る」

○市電の中

大五郎、千代子、八重、カネ、小僧
が市電に乗っている。

千代子、八重、カネは、車窓からの
函館のモダンな街並みに見入ってい
る。

○大五郎の家 中

函館の真砂町にある店兼用の大きな
二階家で、部屋がたくさん有る。

大五郎が八重、千代子、カネを連れて、
家の中を案内し、店と住居の境の廊
下で。

大五郎「ここから先が店だ。店には顔を出
しちゃいけないよ。そこに帳場があつて、
いつも番頭さんがいるから、用事があつ
たら、番頭さんに言いなさい」

大五郎達は階段を上がつて二階に行
く。

二階の六畳の和室に入つて。

大五郎「ここが、千代子の部屋だ。机と筆
筒と鏡台は用意しといたが、欲しい物が
有つたら何でも言いなさい」

八重「千代子、いい部屋じゃないの。ちゃ
んとお礼を言いなさい」

千代子「有難うございます」

千代子、窓を開けてみる。

窓の外は、裏通りに面していて、函
館山が見える。

大五郎、八重、カネは千代子の部屋

を出て行き、千代子は窓辺に腰掛けて大きく息をする。

○大学構内 教室

武雄が一人で手紙を書いている。

窓の外は、雨が降っている。

茂が教室に入って来て武雄の傍に来る。

茂「毎日雨ばかりだなあ。・・・随分早いと思つたら、千代子さんに手紙書いてたのか」

武雄「ああ、ハルさんが出す時に、同封してもらおうと思つてな」

茂「函館の住所、聞いてんだろ。堂々と沢村武雄で出せばいいじゃないか」

武雄「そりゃ、ちよつとまずいだろ。ハル

さんに頼んでくれよ」

茂「そりゃいいが。・・・函館は梅雨が無いから過ごしやすいんだらうなあ」

武雄は手紙を封筒に入れ、茂に渡す。

数人の学生と共に中山康介が教室に入つて来て、康介だけが武雄の傍に来る。

康介は小柄で華奢な身体である。

康介「やあ、上野の周旋屋に行つてみたか」

武雄「ああ、昨日行つてきた」

茂「上野の周旋屋つて」

武雄「夏休みに北海道で働こうと思つてな」
康介「で、どうだった」

武雄「鉄道工事の老夫の募集があつた。一日二円で、旅費も食事代も前借できるら

しつ」

康介「いいじゃないか、一日二円なら、休み中に相当稼げるぞ。それに旅費も前借できるつてか。今、一銭もないからなあ」

茂「鉄道工事の人夫やるのか。武雄はともかく、康介の身体でできるのか」

康介「余計なお世話だよ。茂と違って俺達貧乏学生は、背に腹は代えられないんだよ」

武雄「いつから行ける」

康介「金が無いから、俺は明日からでも行きたいな」

武雄「授業はどうするんだ」

康介「金持ちの茂が、代返してノートもとつててくれるよ。なあ」

武雄「他人に物を頼むのに、そういう言い

方も無いだろう」

茂「僕は構わないが、身体壊すなよ」

教師が教室に入ってきて、学生達は席につく。

○大五郎の家 居間 夜

大五郎が八重の酌で酒を飲んでい

大五郎「千代子はどうしてる。街は一通り見て歩いたかな」

八重「知り合いがいませんからねえ、街の見物にも飽きて、部屋に閉じこもってる事が多いんですよ。ちよつと可哀そうです」

大五郎「そうか、それじゃあ縁談を進めるか。

一〜二年はここで過ごさせたかったんだが」

八重「縁談って、あてがあるんですか」

大五郎「ある。まあ先方の気持ちも有るがな」

○大五郎の家 千代子の部屋 夜

千代子が窓辺で函館山を眺めている。

カネがお茶を持って入って来る。

カネ「ここは、梅雨が無いから過ごしやすいですねえ。今日はどこを見物なさったんですか」

千代子「誰も知ってる人がいないんですもの、どこに行ってもつまらないわ。・・・

東京に帰りたい」

○上野の周旋屋 外 夕刻

裏通りに面したしもたやの玄関に、平沼と書かれた看板が出ている。

玄関横の板壁には『北海道鉄道工事

土工人夫募集』の貼紙が貼つてある。

学生服姿の武雄と康介が来て、玄関の戸を開ける。

○上野の周旋屋 玄関 中 夕刻

武雄と康介が入って来る。

店番の新五郎が奥から出て来て。

新五郎「やあ、この間の学生さんですね、行くことに決めましたか」

武雄「もう一人いいかな」

新五郎、康介をじろじろ見て。

新五郎「そりゃ構いませんが、こちらさん、大丈夫ですか」

康介「ああ大丈夫だ。土工の経験も有る」

新五郎「出発は明日になります、このま

ま出発できませんかね」

康介「旅費はいらんのだな」

新五郎「ええ、旅費から食事から全て手前共が立て替えます。今夜はこの二階にお泊りください。それでよければ、証文を書いていただきますよ」

新五郎は、武雄と康介に証文を書かせる。

新五郎は、二人の証文を確認して。

新五郎「それじゃ、お二階へ」

新五郎に導かれて武雄と康介は二階に上がる。

風体は様々、勤め人風も農民風もいるが、学生服姿は武雄と康介だけである。

部屋の入口には、やくざ風の男が二人座っていて、武雄と康介をじろつと睨む。

やくざ風の男は、移送係の留吉と直治。

武雄と康介は部屋の奥の隅に腰を下ろすが、留吉と直治の視線が気になつて落ち着かない。

新五郎「ここで、昼寝でもしててください。後で皆さんを、夕飯に連れていきますから」

ら

新五郎は、階下に下りて行く。

○上野の周旋屋 二階 夕刻

十畳位の畳部屋に、二十から三十代の男達が五人、ごろごろ寝ている。

○料理屋 二階 夜

十畳位の部屋で、武雄と康介が、周旋屋の二階にいた男達と食事をして
いる。

料理は牛鍋、膳にはお銚子も付いて
いる。

入口に近い席には、留吉と直治もい
て、男達を見張りながら、食事をし
ている。

新五郎が愛想良く、酌をして周って
いる。

康介「牛鍋とは豪勢だな。東京へ出て来て
初めて食べるよ」

武雄「ご馳走になつてる訳じゃない。結局
自分で払うんだよ」

康介「そうか、美味しい物食えば、借金が増

えるだけか」

新五郎が男達に声をかける。

新五郎「この後、女郎屋に行きたい人はい
るか。いいとこ連れてくよ」

三人の男が手を上げる。

武雄と康介は、黙々と食べている。

○列車の中

武雄と康介が三等車両に乗っている。

車内は混んでいるが、二人は座って
いる。

周旋屋の二階に居た男達も二人の周
りに座っていて、殆どの男達が眠っ
ている。

康介が立ち上がり、通路を歩いて行
く。

車両の出口に近い席に座っていた留吉に、康介は手で遮られる。

留吉「どこ行くんだ」

康介「便所だ」

康介は便所に行くが、留吉が付いて来て、康介の用足しの間中、留吉は便所の前で康介を見張っている。

康介が席に戻って来て。

康介「俺達、拘禁されてるようだよ」

武雄「借金踏み倒されたら困るからだよ」

康介「なんだ、気付いてたのか」

武雄「見張りの奴等の駄賃まで、俺達の借

金になるんだろうよ」

康介「えっ、本当かよ」

武雄「ほかに誰が払うんだ。えらい所に来
てしまったかもしれないな」

康介は、不安そうに留吉の様子を窺う。

武雄は腕組みをして目を瞑っている。

○青函連絡船 デッキ 夜

留吉と直治が煙草を吹かしている。

武雄が来て、二人に話しかける。

武雄「俺達の現場は北海道のどこだ」

直治が武雄を睨んで威圧するが、武

雄は睨み返して動じない。

留吉が薄笑いして。

留吉「北海道のどこかだよ」

武雄「函館で、平沼の店に寄りたいたんだが」

留吉「どんな用だ。俺が取り次いでやる」

直治「函館じゃあ、すぐに列車に乗り継ぐ
んだ、途中下車する時間はないぜ」

留吉と直治が、笑いながら船内に戻る。

船は函館に近づき、眼前に函館の夜景が見える。

武雄は暫く夜景を眺めているが、大きくため息をついて、船内に戻って行く。

○列車の中

函館駅に停車している列車の三等車両に武雄や康介等、東京から連れて来られた男達が座っている。

そこに、別の十数人の男達が乗り込んで来て、武雄達の周りに座らされる。

彼らは、北海道で募集された男達で、

見張り役も三人増える。

康介は落ち着かず立ったり座ったりしながら、周りを警戒している。

武雄は、窓からホームの『函館』と書かれた看板をじっと見つめている。汽笛がなり、列車が動き出す。

○俱知安駅 外 夜中

十数人の男達が、改札から出て来る。武雄と康介もその中にいる。

函館から乗り込んで来た見張り役の初太郎が、大声で男達に指示をする。

初太郎「みんな、ここに整列しろ。ここから飯場までは歩いて行く。俺が先導するから付いて来い。離れるなよ。逃げたつて無駄だ、すぐ捕まえる。わかったな」

男達が真つ暗な道を、ぞろぞろと歩いて行く。

○飯場 外 早朝

尻別川の河岸の丘に立つ丸太小屋の飯場。

飯場に朝日が当たっている。

飯場の前の広場に、たこ十数人が整列させられていて、四人の棒頭が周りで見張っている。

たこ達は、禪にぼろぼろの袴纏一枚の姿で、髪や髭が伸び放題である。

棒頭は、ニツカボツカに編み上げ靴、背に池田組と書かれた袴纏を着ている。

二人の棒頭が馬に跨り、一人は獯猛

そうな番犬を引いている。

尻別川の河原から、初太郎に先導されて、武雄等十数人の男達が飯場の前の広場に上がって来る。

整列しているたこ達は、無表情で武雄達を見ている。

馬上の棒頭の一人権三が、武雄達に向かつて怒鳴る。

権三「新入りも後ろに並べ」

初太郎が武雄達十数人の男達を誘導して、たこ達の後ろに並ばせる。

権三「出かけるぞ〜っ」

たこ達「おう〜っ」

権三の掛け声に合わせて、たこ達が声を上げて応える。

権三が馬を走らせると、たこ達が続

いて小走りで出かけて行く。

最後方から、犬を引いた棒頭の清吉ともう一人の馬上の棒頭の定次が続く。

武雄達は、その光景を茫然と見送る。

○飯場 収容室

収容室は二十畳位の広さで、真ん中が土間、土間の周りが板の間になっている。

武雄等連れて来られた男達は、板の間に座らされている。

男達の前に、飯場の親方、帳場係、棒頭の久弥が立って男達を睥睨している。

武雄達を連れて来た移送係の男達は

入口に立ち、にやにやしながら見て
いる。

親方「いいか、ここは京極軽便線の工事を
請け負う池田組の飯場だ。お前達はここ
で、借金を返し終わる迄、たことして働
いてもらう。もちろん、借金が無くなっ
た後も、働いてもらってかまわない。こ
こに居る間は、棒頭の指示に全て従え。
勝手は許さん。たこ同士の諍いも許さん。
判ったか」

久弥が手に持った棒を振り上げて。

久弥「ここでは指示されたら、『おうっつ』
と声を上げて応えるんだ。忘れるな」

何人かの男が『おうっつ』と声を上
げる。

久弥「一斉にやるんだよ」

武雄も含めて全員の男達が『おうっ』と声を上げる。

帳場係「賃金は一日一円、草鞋、足袋、下帯、手拭、チリ紙、煙草、必要な物は俺に言え。全てツケでいい。しかし儉約しないと、借金は増えるばかりだぞ」

帳場係はにやにや笑う。

武雄が立ち上がった。

武雄「話が違う。賃金は一日二円のはずだ」
久弥が棒を振り上げて身構える。

親方がそれを制して。

親方「まともに働けば二円だよ。お前みたいな学生が、一人前に働けると思ってるのか。土工をなめるんじゃない。お前なんぞ、三日で音を上げるさ。そういう事は、働いてみてから言え」

帳場係「今着てる物は全て脱げ。ここを出る時までこちらで預かる。その代り袴纏を支給する。たこは褌と袴纏だけだ。食事は一日四回、布団は二人で一組。仲よくしろよ」

帳場係はにやにや笑う。

親方「新入りのたこ様は、長旅でお疲れの様子だから、今日は飯を食ったら寝ていただく。最初で最後の休日だ、ははは・・・」

親方、帳場係、移送係の皆が大笑いする。

武雄達は服を脱ぎ、帳場係に渡し、代わりに袴纏と、瑠璃引きの大小の腕、箸を受け取る。

○飯場 飯台

収容室の土間の前に、立って食べる高さの飯台が並んでいる。

たこ達は、椀と箸を持って炊事場の前に並び、炊事係に朝飯をよそってもらう。

朝飯は、山盛りの米飯の上に小さな塩鱒、殆ど具の無い味噌汁。

たこ達は、朝飯を飯台で立って食べる。

康介は、収容室の板の間に持って行って座って食べようとするが、久弥がそれを見て康介に走り寄り、康介を蹴倒す。

久弥「たこは、立って食べるんだよ」

康介は、板の間に散らばった飯を椀

にかき集める。

○飯場 管理人室

移送係の男達に酒と食事が振る舞われて、親方と帳場係が相手をしている。

初太郎が、連れて来た男達の証文を懐から取出し、親方の前に差し出す。

親方は、証文を一枚一枚確かめて帳場係に渡し、帳場係は証文を見て算盤を入れる。

親方「あの学生のちびと、白髪の混じった奴は、使い物になんねえ。連れて帰ってくれ」

初太郎「親方、そりゃ殺生だ。ここまで連れて来るだけでも大変なのに、連れて帰

れとは無茶ですよ」

で結構おつかねえんですよ」

親方「使い物になんねえ奴を選んだのは、そっちだろう。ああいうのは、ここでは

邪魔なだけなんだよ。大五郎に良く言うておけ」

初太郎「半値で結構ですから、連れて帰るのだけは、ご勘弁を」

親方「半値、半値だって高い。人柱にして埋めちまうにしたって、人手がかかるんだ」

初太郎「そこを何とかお願いしますよ」

親方「おい、二人を半値で、全部でいくらだ」
帳場係「へい、千五百二十円です」

親方「それじゃ、千五百円だな」

初太郎「有難うございます。これでなんとか帰れますよ。大五郎のおやじも、あれ

帳場係が札を数えて初太郎に渡す。

○飯場 収容室

板の間と土間の境に丸太が置かれていて、たこ達はその丸太を枕に寝ている。

武雄と康介は、抱き合う様に同じ布団に寝ている。

男達の多くは眠っていて、鼾の音が響く。

武雄が小声で康介に話しかける。

武雄「騙されたな」

康介「これがたこ部屋って言うやつなんだな。こんな所じゃ三日ももたないよ。・・・殺されちまう。なあ、逃げよう」

武雄「逃げるにしたって、土地勘も無いし、すぐ捕まってしまうさ。少し様子を見ないと無理だな」

康介「ああ、来るんじゃないかった」

康介は膝を抱えて布団の中に丸まる。

○大五郎の家 千代子の部屋

千代子が窓辺で本を読んでいる。

カネが入って来て、手紙を渡す。

カネ「ハルさんから、お手紙ですよ」

千代子「えっ、ハルさんから」

カネは、手紙を渡すとすぐに出て行く。

千代子は嬉しそうに手紙を開封する。

封筒の中から、ハルの手紙と卒業式

の日に撮った写真、武雄の手紙が出

て来る。

千代子は写真を一枚一枚じつと見て、ハルの手紙を読む。

ハルの声「千代子さん、函館の絵葉書有難う。

モダンで素敵な街なので大変驚きました。

私は、もっと田舎の町だと思っていました。

卒業式の日の写真を同封します。あの日

は楽しい日であり、悲しい日でしたね。

千代子さんが東京からいなくなるなんて、

今でも信じられません。ポツカリ穴が開

いてしまつて、毎日ぼうつと過ごしてい

ます。武雄さん、北海道に出發したそうですねよ。早く会えるといいですね。私も

北海道まで行つてしまおうかしら。また

お便りください」

武雄の声「千代子さん、函館はどんな街で

すか、慣れましたか。今日、お父上の上野の店に行つて来ました。北海道の鉄道工事の募集が有つたので、応募しました。北海道に行きます。必ず会いに行きます。待つててください」

千代子は手紙を読み終えると、武雄と千代子の写っている写真を暫くじつと見つめ、手紙と写真を机の引き出しにしまつて、部屋を出て行く。

○大五郎の家 帳場

番頭の伍助が帳場で事務をしている。店先の土間には、やくざ風の男が二人煙草を吹かしている。

奥から千代子が出て来て、番頭に声をかける。

千代子「番頭さん、ちょっとお願いがあるんですけど」

伍助は驚いて千代子の方を振り向く。店先のやくざ風の男達も、千代子をじろつと見る。

伍助は慌てて立ち上がり、千代子を店先から見えない奥へ押し戻す。

伍助「お嬢様、店先に来てはいけないと、お父様から言われているでしょう」

千代子「番頭さん、お父さんには内緒でお願いがあるの。聞いてくださりません」

伍助「旦那様に内緒つて、どんな事です」

千代子「東京のお店で、沢村武雄という大學生に、北海道の鉄道工事の仕事を斡旋したはずです。どこの現場で働いているのか、調べてくれませんか。知りたいの」

伍助は怪訝な顔をして。

伍助「うちで、大学生に土工人夫の仕事を
斡旋するような事はありませんよ。お嬢
様は、どうしてそんな事を知りたいんで
すか」

千代子「東京のお友達から頼まれたの」

伍助「調べてみますが、きつと何かの間違
いですよ」

千代子「お父様には内緒でお願いね」

伍助「解りました。お部屋の方にお知らせ
に伺いますから、二度とお店に顔を出し
てはいけませんよ。旦那様に私が叱られ
ますから。いいですね」

伍助は帳場に戻って行く。

○大五郎の家 千代子の部屋

千代子が戻って来て、机の引き出し
から武雄の写真を取出し、じつと見
つめる。

○大五郎の家 帳場 夜

店の表戸は閉められ、伍助だけが帳
場で事務をしている。

大五郎が奥から帳場に来る。

大五郎「伍助さん、遅くまでご苦労さん」

伍助が帳簿を大五郎に差出し。

伍助「旦那様、特に変わった事は無かつた
んですが、昼間、お嬢様がお店に顔を出
されまして・・・」

大五郎「千代子が・・・何しに」

伍助は斡旋記録の帳簿を開いて大五
郎に見せながら、小声で。

伍助「この東京で応募してきた沢村武雄と
いう大学生について、送り込まれた現場
はどこか調べて欲しいと頼まれましたね」

大五郎は帳簿をじつと見ながら。

大五郎「どうしてこの男の事を・・・」

伍助「東京のお友達に頼まれたとの事で、

旦那様には内緒にしてくれと・・・」

大五郎「で、何と答えたんだい」

伍助「ええ、うちじゃ土工人夫の仕事を、

大学生に斡旋することは無い。何かの間

違えだろうと申し上げました」

大五郎「ああ、それでいい。それで通しな

さい。私は知らない事しておくからね。

でも、この沢村という大学生は千代子の

知り合いなんだろうかねえ・・・池田組

のたこ部屋じゃ、きつと出てこれないよ」

伍助「何か手を打ちますか」

大五郎「いや、いい。どうせ土工に応募し

てくるようじゃ、貧乏学生だろ。千代子

の傍をうろろされちゃ、かなわんから

な」

伍助「へい、かしこまりました」

大五郎「じゃ、後は頼んだよ」

大五郎は奥に戻って行く。

○大五郎の家 千代子の部屋 夜

伍助が千代子の部屋に来て、廊下か

ら襖越しに声をかける。

伍助「お嬢様、番頭の伍助でございます」

千代子が襖を開け顔を出す。

千代子「調べてくれましたか」

伍助「へえ、調べてみたんですが、やはり

沢村武雄という方に、うちの店で仕事を

斡旋した事実は無いんでございますよ」

千代子「東京にも問い合わせてください」

んですか」

伍助「へえ、東京にも問い合わせしてみました」

千代子「そうですか・・・」

カネが来て。

カネ「あら番頭さん・・・お嬢様、夕食の

支度ができましたよ」

伍助「それでは私はこれで」

番頭は帳場に戻って行く。

カネ「番頭さんがお嬢様の部屋に来るなん

て」

千代子「私が頼み事をしたの。お父さんや

お母さんには内緒にしてね」

カネ「はい、解ってます。さあお食事ですよ」

カネも部屋を出て行く。

○大五郎の家 居間 夜

大五郎、八重、千代子が、カネの給

仕で食事をしている。

大五郎「明日から四日ほど小樽に行つて来

る」

八重「今度は小樽ですか」

大五郎「小樽の取引先に池田組という土建

屋が在るんだが、北海道では五本の指に

入る会社だ。その社長に会つて来る」

八重「珍しいですわね、仕事のお話をなさ

るなんて」

大五郎「仕事の話じゃ無い。その次男坊

に修二郎というのがおるんだが、この男

が若いのにできる男でな。帝大出て、池

田組の営業周りを一手に引き受けている。背も高く、男っぷりもいいぞ。帝大出てるだけあって、頭も切れるし、人当りもいい」

八重「あら、べた褒めですね」

大五郎「いい男なんだ。その修二郎に千代子を嫁がせようと思つてな。頼んでくる」

八重「千代子の縁談ですか。それはいいお話ですわ。そんな方に嫁げるんでしたら、千代子も幸せね」

千代子は、浮かぬ顔で黙々と食べている。

大五郎「まあ、修二郎君にも好みは有るだろうから、来月函館に来てもらつて、見合いをしようと思つたんだが」

八重「それがいいですわ、ねえ千代子、お

父さんに感謝なさい、こんない縁談進めていただいて」

千代子「お嫁になんて行きたくありません」

八重「千代子・・・」

大五郎「まあ、千代子も会えば好きになるよ」

○工事現場

京極軽便線の鉄道建設工事現場。

汚れた袴纏に禪、草鞋履きのたこ達が、二人一組でモッコを担いで土を運んでいる。

棒頭が棍棒を持つたこ達を見張つていて、立ち止まったり、よろめくたこを見つけると、容赦なく尻を棍棒で叩く。

棒頭が、指示をしたり気合をかける

と、たこ達は一齐に『おうっ』と声を上げて応えるが、声を上げないたこは、棒頭に棍棒で叩かれる。

武雄と康介もモッコを担いでいる。

康介はもう体力の限界で、意識朦朧としながら、よろよろと歩いている。

棒頭の定次が康介の後ろに張り付いて、康介がよろける度に、棍棒で尻を叩く。

康介はどうとう倒れ込む。

それを見ていた武雄が定次に言う。

武雄「もう、こいつは無理だ」

定次「引っ込んでろ、無理かどうかは、俺が決めるんだよ」

定次は武雄を突き飛ばし、武雄はモッコを一緒に担いでいた相棒もろ共

倒れる。

定次は康介を蹴り上げ、康介は草叢に転がり動かない。

定次「休んでねえで、早く運べ」

定次は、棍棒で威嚇して武雄を立たせる。

武雄はモッコを担ぎなおして歩き出す。

○飯場 外 夕刻

権三の馬を先頭に、たこ達が帰ってくる。

武雄は康介を背負って帰ってくる。

権三が武雄に向かって怒鳴る。

権三「こいつは、病人部屋に放り込んでけ」
武雄は康介を背負って、飯場に入る。

○飯場 病人部屋

三畳位の畳部屋で、康介が布団の上に寝ていて、武雄が傍で様子を見ている。

康介が、蚊の鳴く様な声で武雄に言う。

康介「もうだめだよ」

武雄「弱気になるな、寝てれば治る」

部屋の外から権三達の声が聞こえる。

権三の声「あのチビは、もう使い物になん

ねえ。明日、人柱にでもするか」

炊事係の声「まだ人柱にすんのは、もった

いねえ。それなら俺にくんろ」

権三の声「爺さんの手下にか、まあ似合い

だな。逃がすんじゃねえぞ」

炊事係の声「あいつあ、一人じゃ逃げられん」

武雄が康介に小声で。

武雄「よかったな、あの爺さんのお蔭で助かったな。安心して良く寝ろ」

武雄は病人部屋を出て行く。

○飯場 収容室 夜中

たこ達は寝入っていて、鼾の音が喧しい。

一人で眠っている武雄の布団に、たこの亀八が潜り込んでくる。

武雄が驚いて目を覚ますと、亀八が

武雄に耳打ちする。

亀八「俺達は近々ここから逃げる。きつと

棒頭が犬つれて追って来る。そんな時にゃ、

現場の見張りが手薄になるから、お前も

逃げる。四方八方に一斉に大勢で逃げ出

すのが、捕まらないこつだ」

武雄「援護して、逃げやすくしろって事か」

亀八「そんな事頼んじやいねえ、一緒に逃げようって言ってるんだ」

武雄は亀八に背を向けて黙り込む。

○大五郎の家 帳場 夜中

真つ暗な帳場には誰もいない。

奥から蝋燭の灯りが一つ近づいて来る。

千代子が足音を忍ばせながら、蝋燭を持って帳場に来る。

千代子は、周りの気配を窺いながら、帳簿を捲って武雄の名を探す。

何冊目かの帳簿の中に沢村武雄の名前を見つける。

『京極輕便線鉄道工事、池田組飯場』

○大五郎の家 千代子の部屋 夜中

廊下を、蝋燭を持って千代子が来る。

千代子は、自分の部屋に入り、蝋燭を消して、ひいてある自分の布団の中に入る。

千代子は、小声で独白する。

千代子独白「京極輕便線ってどこかしら……千代子は布団の端を握りしめて目を瞑る。

○千代子の回想（不忍池の畔）

武雄が千代子のの手を取り。

武雄「必ず函館に会いに行くよ」

○千代子の回想（上野駅ホーム）

千代子と武雄が両手を握りしめて見
つめ合う。

武雄「必ず会いに行く」

千代子が大きく頷く。

機関車の汽笛が鳴り列車がゆっくり
動き出し、千代子はデッキから身を
乗り出して手を振る。

ホームで手を振る武雄、ハル、茂が
遠ざかって行く。

○飯場 収容室 早朝

帳場係が、たこ達が枕にしている丸
太の端を掛矢で叩くと、たこ達が飛
び起きる。

起きたたこ達は、我先にと便所に殺

到し、便所の前に列ができる。

列の後ろに並んでいた亀八が叫ぶ。

亀八「早くしろ、漏れちまうじゃねえか。

外でさせろ。ここでしちまってもいいの
かよ」

他のたこ達も騒ぐ。

帳場係が、仕方無く飯場の入口の扉
の鍵を外すと、亀八等四人のたこが
扉を開けて外に飛び出す。

○飯場 外 早朝

飯場の前の広場の端で、亀八達四人
のたこが、草叢に向けて立ち小便を
している。

帳場係が、慌てて飯場から飛び出し
て来て、亀八達に向かって怒鳴る。

帳場係「小便済んだら、戻って早く飯を食え」

帳場係は、飯場の中に戻る。

帳場係が飯場に戻ったのを見届けて、

亀八達は、草叢に駆け込み消える。

定次「早くしろ、整列」

たこ達が広場に整列する。

権三「おい、足りねえぞ、誰か逃げたな」

久弥「帳場係、点呼を取れ」

帳場係が飯場から慌てて出て来て、

帳簿を見ながらたこの名前を一人一

人呼ぶ。

名前を呼ばれたたこが、『おうっつ』

と応える。

権三「逃げたのは四人か」

久弥が帳場係の顔を平手打ちする。

権三「お前達は飯場に戻っておとなしくし

てろ、定次、清吉、行くぞ」

たこ達は、久弥に棍棒で追い立てら

れながら、飯場の中に戻る。

権三と定次は馬に乗り、清吉が犬を

○飯場 飯台 早朝

たこ達が、飯台で朝飯を食べている。

二十数人のたこが、飯台の周りに立

って食べているので、ごった返して

いる。

武雄もその中で食べている。

○飯場 外 早朝

棒頭が準備を終えて待ち構えている

所に、たこ達がぞろぞろ飯場から出

て来る。

引いて、逃亡したたこの追跡に出かけて行く。

○飯場 収容室 早朝

たこ達が、板の間に正座させられている。

久弥が入口で獵銃を持って立っている。たこ達の前に親方が立って怒鳴る。

親方「逃げた奴は必ず捕まえてなぶり殺しだ。良く覚えておけ。生け捕りにしてきたら、面白いものを見せてやる。お前達は、棒頭が帰って来るまで寝てろ。昼飯はぬきだ」

○河原

馬に乗った権三と犬を引いた清吉が来る。

犬が何か臭いを嗅ぎつけて吠える。

清吉が犬の紐を外すと、犬は山の方向に一目散に走り出す。

犬の後を権三と清吉が追って行く。

○飯場 外 夕刻

飯場が夕日に照らされている。

権三と清吉が帰ってくる。

権三は、一体の死体を乗せた馬を引き、ロープで縛られ馬に引かれたたこが、一人よろよろ付いて来る。

清吉が犬を犬小屋に繋ぎ、犬が吠える。

権三は、死体を馬から下ろして広場

の真ん中に放り出し、ロープで縛つたたこを、広場の端の木に吊るす。

棒で滅多打ちにする。

吊るされたたこは、最初声を上げて呻いているが、気を失う。

○飯場 収容室 夕刻

権三「爺さん、酒持って来い」

権三が入って来て、掛矢で丸太を叩いて怒鳴る。

炊事係が飯場に戻って、一升瓶の酒を持って来て権三に差し出す。

権三「全員表に出て並べ」

寝ていたたこ達が、飛び起きる。

権三は、酒をごくごく飲んで後、口に含んでは、吊るしたたこの身体に霧にして何度も吹きかける。

○飯場 外 夕刻

権三「明日の朝が楽しみだ」

たこ達は死体の前に整列させられ、親方、帳場係、炊事係、久弥、清吉、権三が、たこ達の前に並んでいる。

権三は一升瓶を持って、高笑いしながら飯場に入る。

武雄も康介も、整列している。

親方が、たこ達に向かって怒鳴る。

権三「いいか、よく見ておけ」

権三が、木に吊るされたたこを、棍

親方「逃げたらあの様だ。あの世まで行つてもらおう。それがここの掟だ。さあ、見

世物は終わりだ。飯場に戻れ」

いる。

たこ達は、それを見て目を背ける。

○飯場 収容室 夜中

権三「おい、その四人で死体を運べ」

たこ達が眠っている。

武雄と康介が同じ布団で寝ている。

指名された武雄等四人のたこが、二体の死体をモッコに乗せて担ぐ。

康介が武雄に小声で話しかける。

権三「出かけるぞ〜っ」

康介「明日から炊事係で助かった。・・・残り

たこ達「おう〜っ」

りの二人は逃げ切れたんだろうか」

馬上の権三を先頭に、たこ達が小走り

武雄「黙って早く寝ろ」

りで出かけていく。

武雄は、モッコで死体を担いで行く。

○飯場 外 早朝

棒頭が準備を終えて待ち構えている

○工事現場 早朝

所に、たこ達がぞろぞろ飯場から出て来る。

武雄達は担いで来た死体を、埋めた

て来る。

て現場に抛り込み、死体に向かつて手を合わせる。

吊るされているたこの身体には、ア

ブ等の虫が集って、真っ黒になって

死体の上に、たこが運んで来た土が

次々とかけられる。

権三が、武雄達に向かつて怒鳴る。

権三「手なんて合わせてないで、早く働け」

武雄達は、空のモッコを担いで、土の採取場へ戻って行く。

○大五郎の家 炊事場

カネが千代子に料理の仕方を教えている。

千代子「母さんたら、自分は何もできないくせに、花嫁修業だとか言っつて、私には料理や裁縫ばかりさせるんだから・・・」

勝手口に『春日楼』の女将が訪ねて来る。

女将「ご免くださいさいまし」

カネが勝手口で応対し、千代子はそ

れを何気なく見ている。

カネ「はい、どなたですか」

女将「大森町の春日楼の者なんです、番

頭さんと呼んでもらえませんか」

カネ「ここは勝手口なんで、申し訳ありませんが、表に回ってくださいな」

女将「店では話せないから、呼んでくれて頼んでるんですよ。春日楼の女将が来てるっつて言っつてもらえば、解りますよ」

カネ「へいへい、承知しました。ちよつとお待ちください」

カネは、店に伍助を呼びに行く。

カネと一緒に伍助が勝手口に来る。
伍助「何です、どうかしましたか」

女将「いやね、昨日から、飛びつちよが二人転がり込んでるんですよ。大五郎さん

とここで、焼き直しの交渉して来いって」

伍助「どこから逃げて来たんだい」

女将「京極軽便線の池田組だって言つてましたよ」

千代子が思わず女将の顔を見るが、

女将は千代子に気付いていない。

伍助「名前は判るかい」

女将「たしか、亀八と京四郎だったかな」

伍助「そりゃ札付きの飛びっちょだ。いいでしょう、うちで引き受けるから、二日

三日遊ばせてやってください」

女将「うちの掛かりを、お宅で全部もつてくれるんですね」

伍助「ああ、うちで焼き直しますよ。次の

飯場が決まったら引き取りに伺いますから」

女将「それじゃ、宜しく願います」

女将は、機嫌良く帰って行く。

伍助は何も無かった様な顔で店に戻る。

千代子は、大根の皮を剥きながら二

人の会話を全て聞いていた。

○大五郎の家 千代子の部屋

千代子が机の引出しから武雄の写真を出し、じつと見つめている。

千代子は、意を決した様に立ち上がり、写真を胸の合わせにしまつて出て行く。

○大五郎の家 勝手口

千代子が、勝手口から人目を避ける

ようにして、裏道に出て来る。

○春日楼 玄関 中

千代子が入って来て下足番に声をかける。

○市電大森町停留所

市電が走って来て、大森町の停留所で止まり、千代子が降りる。

千代子「女将さんにお会いしたいんですが」
下足番は千代子をじろっと見て奥に入る。

○大森町遊郭

千代子が、遊郭の街並みの中を『春日楼』を探して歩いて行く。

奥から女将が怪訝な顔をして出て来る。

○春日楼 外

千代子が春日楼を見つけ、店の前に来る。

女将「大五郎さんとこの娘さんが、何の用だい。お父さんに頼まれたんかい」

千代子は、暫く入るのを躊躇して立ち止まっているが、意を決して中に入る。

千代子「いえ、父には内緒でお願いしたい事が有るんです」
女将「まあ、ここではなんだから、お入りよ」

女将は千代子を奥へ案内する。

○春日楼 小部屋

女将と千代子が向い合せに座つてい
る。

女将「頼みごとつて、なんだい」

千代子「こちらに池田組から逃げて来た人
が居ると、聞いたもんですから。ちよつ
と会わせて欲しいんです」

女将「誰に聞いたんだい、番頭かい。口が
軽いね、全く。．．．飛びっちは無頼の
やからだからね、お嬢さんが会うような
連中じゃないよ。さつさとお帰り」

千代子は、懐から五円札を出して、女将
の膝の前に置く。

千代子「逃げて来た池田組の飯場に、沢村

武雄という大学生が居たかどうか、知り
たいんです」

女将「居たかどうか、判ればいいんかい」

千代子「そうです、できれば、その飯場が
どこに在るのか教えてもらえれば．．．」

女将「そうかい、じゃあこうしよう。あた
しが代りに訊いてやるから、あんたは隣
の部屋でそれを聞いてればいい」

千代子「有難うございます。父と番頭さん
には、くれぐれも内緒でお願いします」

女将「解つたよ」

女将は、五円札を懐に入れると立ち
上がり、小部屋を出て行く。

千代子も女将の後に続いて出て行く。

○春日楼 客間

八畳位の和室で、亀八と京四郎が、それぞれ女郎を侍らして酒を飲んで
いる。

亀八は禪一つの裸で、上半身は総入れ墨。

京四郎は禪に浴衣を羽織っている。

女郎は、二人共に長襦袢一枚で、亀八、

京四郎にしなだれて酌をしている。

女郎が襖越しに声をかける。

女郎の声「ちよつといいかい、入るよ」

女郎が襖を開けて入って来る。

亀八「なんだ、酒持って来たんじゃないかねえのか」

女郎「いやね、池田組の飯場の事を訊きた

いって人が来てね」

亀八の顔色が変わり、立ち上がる。

亀八「飯場の事が訊きたいだと、そりゃ、

どこのどいつだ」

亀八は、隣の部屋との間仕切りの襖を開ける。

隣の部屋には、千代子が座っていて、突然襖が開いて、禪一つの亀八が現れたので驚き、身構える。

亀八「何だ、女か。・・・そんなところに居ち

や話もできねえ、こつち来て酌をしろ」

亀八は千代子の手頸を掴んで、引き

立てようとする。

女郎が慌てて飛び込んで来て、亀八

と千代子の間に入り、亀八を制する。

女郎「何すんだよ。そこに相方がいるだろ」

亀八はにやにやしながら席に戻って、

銚子で酒をラッパ飲みし、女郎の乳を掴む。

女郎が嬌声を上げる。

亀八は酒を呷る。

女将「飯場に、沢村武雄とかいう名の学生、居なかつたかい」

亀八「逃げるつたつて、命がけだ。捕まりやリンチで殺されちまう。あいつも誘つてやつたんだが、来なかつた。・・・まあ、

亀八「おい、そんな奴居たか」

京四郎「あの、いかつい身体してた方だろう」

あいつじゃ、逃げきれんかつたろうがな」

亀八「ああ、確かにチビとでかいのと、学生が二人居たな」

京四郎「土地勘の無い余所者じゃ、無理だ」
亀八「なあ兄弟、飛びつちよ家業も楽じゃねえよな」

千代子「武雄さんは、そこに居たんですね」

女将「何言つてんだい。あんたら、こうやつてまた借金作つて、その地獄の飯場に

亀八「居たらどうだつてんだ。えつ、あいつは、おまえの色か」

戻ろうつてんだろ。頭おかしいんだよ」

亀八は、にやにやしなから、親指を立てて、千代子に見せる。

千代子「その飯場はどこにあるんですか」

亀八「あいつも、あそこに居たら殺されち

京四郎「俱知安の山ん中よ。熊がうようよ

まうぞ。死ぬまで働かされてな。たこ部

居るような所だ」

屋ちゅうのは、そういう所だ。なあ兄弟、

亀八「ねえちゃんが行つたつて、助けられ

そうだろ、だから俺たちや逃げるんだ」

やしねえぞ。はははは・・・」

亀八と京四郎は大声で笑う。

千代子「どうしたら助けられるでしょうか」

亀八「そうさな、金で買い戻すんだな。た

こは、奴隷だ。商品なんだよ。しかし、

吹っ掛けられるぞ。二百円、いや三百円

って言うかもしれん」

○春日楼 外

千代子が春日楼から出て来る。

千代子は、ふらふらと遊郭の街並み

の中を歩いて行く。

○大五郎の家 勝手口

千代子が入って来る。

炊事中のカネが、憔悴した千代子を

見て。

カネ「千代さん、どうしました」

千代子「何でも無い。ちよつと気分が悪いの」

千代子は、逃げる様に奥に入る。

○大五郎の家 千代子の部屋

千代子がふらふら入って来る。

千代子は、机の前に座り、暫く茫然

としているが、胸の合わせから武雄

の写真を取り出して、じつと見つめ、

わつと泣き出して机に突っ伏す。

○大五郎の家 客間

八畳の和室で、大五郎と池田修二郎
が酒を飲んでいる。

大五郎「まあ、足を崩して楽になさい」

修二郎「お言葉に甘えて、失礼します」

修二郎は足を崩して胡坐をかく。

大五郎が修二郎に酒をすすめながら。

大五郎「規模のでかいのは、次はどこだね」

修二郎「根室です。釧路から根室まで釧路

本線を延伸させる工事が始まります。う

ちも、四つの工区をとりました」

大五郎「そりゃあいい。釧路の宗一郎にも

話を通してやってくれよ。で、何人位に

なる」

修二郎「ざっと、二百人は超えるでしょう」

八重がお銚子を運んで来て、大五郎

に渡しながら。

八重「お話が弾むのはよろしいですけど、

今日は千代子の事もお忘れなく」

大五郎「そうだ、そうだ、今日は千代子に

会いに来てもらったんだ。千代子はどう

した。早く呼んできなさい」

八重「はいはい。今連れてきます」

八重は客間を出て行く。

○大五郎の家 千代子の部屋

千代子は普段着のまま、本を読んで
いる。

八重が入って来て、千代子を叱る。

八重「まだ着替えもしてないの。早く支度

なさい」

千代子「見合いなんてしないって言ったで

しょ。まだ、お嫁になんて行かないわ」

八重「千代子、小樽から来られた修二郎さ

んに失礼でしょ。帯結んであげるから、

早くなさい」

千代子は、渋々立ち上がり着替え始

める。

○大五郎の家 客間

八重が千代子を連れて来て、廊下に座る。

修二郎が慌てて正座する。

大五郎「おう、来たな。娘の千代子だ。そ

んな所じゃなんだ、上にながりなさい」

千代子は座敷に上がり座って挨拶する。

千代子「千代子です」

修二郎「池田修二郎です。初めまして」

大五郎「千代子は、この春、東京の高等女

学校を卒業したばかりだ。読み書き算盤

は得意だぞ。裁縫や料理はどうだ」

八重「今、きつちり修業させてますよ。そ

れよりあなた、二人だけにしてあげたら
ようございませよ」

大五郎「そうだな、修二郎君、酔い覚まし
に千代子と街を散歩してきたらどうだい。
帰って来たらまた飲もう」

修二郎「はい。千代子さん、よろしいですか」
千代子は、俯いたまま。

八重「そうなさい。ねえ千代子」

修二郎「それではちよつと行ってまいりま
す」

修二郎が立って先に出て行き、千代
子も八重に押されるように立って後
に続く。

○函館 二十間坂

修二郎がゆつくり坂を上がってくる。

千代子が一歩遅れて付いて来る。

修二郎は、度々後ろを振り返りながら、千代子に話しかける。

修二郎「函館に来られて、まだ間もないんですでしたね。どうです、函館の街は、気に入りましたか」

千代子「美しい街です。でも……」

修二郎「でも……」

千代子「……」

修二郎「函館は坂が多いでしょう。小樽も坂が多くてね。今住んでる家は坂の上にあるんで、見晴らしは良いが、往き帰りが大変です」

二人は、坂の上で右に折れる。

眼下に函館の街と函館港が一望できる。

修二郎と千代子が来て、眼下の景色を見ながら。

修二郎「函館と小樽は良く似ているなあ」

千代子「修二郎さん、お仕事のお話を聞かせてくださいませんか」

修二郎「えっ、仕事の話。私の仕事に興味があるんですか。驚いたな、さすがに女学校出だ。どんな話が訊きたいですか」

千代子「建設現場にも行かれるんですか」

修二郎「いえ、殆ど現場には行きません。

国や道庁の役所を周って仕事を取ってくるのが私の仕事ですから。今、日本は大変な状況です。早く北海道の開拓を進めて、多くの鉱物や木材を運び出せるよう

にしなければなりません。だから、道路や鉄道を建設する事は大事な仕事だと思つてます」

千代子「現場では、人夫を拘禁して、奴隷の様に働かせていると聞いたんですが、本当でしょうか」

修二郎「どうしてそんな事を・・・」

千代子「いえ・・・」

修二郎「北海道の奥地の工事は苛酷な仕事です。お国の為だと言っても、高い賃金を出しても、なかなか人夫は集まりません・・・そこで、ぶらぶらしてる奴や、

借金が返せなくなつた人を、なかば強制的に連れて来て働いてもらう。もちろん、賃金はちゃんと払いますよ。しかし、強制的に連れて来ると、働かないで逃げよ

うとするのが出て来る。だから拘禁せざるを得ないんです。この制度は、僕は必要悪だと思います」

千代子「私は嫌いです。父の周旋屋の仕事も、土建屋の仕事も・・・」

修二郎「千代子さん、仕事というのは、好き嫌いでは、できないものですよ。他人に嫌われても、やらなければならぬ仕事も沢山ある。それを黙々とやって、身代を築かれたお父様は、僕はりっぱだと思えます」

○工事現場

周りの木々が紅葉し始めている。

たこ達がモッコを担いで土を運んでいる。

武雄もモッコを担いで土を運んでい
る。

武雄は、髪も髭も伸び放題で、全身
真っ黒に日焼けし、着ている絆纏も
ボロボロに破け、ルンペンの様な風
体である。

武雄は、運んで来た土を埋め立て現
場にあけると、大きく息を吐いて、
真っ青な空を見上げる。

○飯場 収容室 夜中

たこ達は寝入っていて、鼾の音が喧
しい。

武雄と康介は同じ布団で寝ている。

武雄が小声で康介に話しかける。

武雄「もう俺も限界に近い。・・・こんな所

で死ぬ訳にはいかん。まだ力が残ってる
うちに逃げるしかない。康介、一緒に逃
げよう」

康介「俺は逃げ切れる自信が無い。きつと
足でまといになる。武雄、一人で逃げて
くれ」

武雄「いや、おまえを置いていく訳にはい
かん。一緒に行こう」

康介「炊事係なら、何とか生きていける。
雪が降るまで我慢すれば、きつとここを
出られる。俺を気にせず、一人で逃げて
くれ」

武雄「そうか・・・」

康介「お互い生きぬいてまた会おう」

武雄「康介、達者でな・・・」

武雄は、そつと布団を抜け出す。

收容室の入口には、不寝番役の清吉がいるが、ぐっすり眠っている。

武雄は、足音を忍ばせて、清吉の横をすり抜ける。

便所の入口にはランプが下がっていて、そこだけが少し明るい。

武雄は、便所の中に消える。

○飯場 外 夜中

飯場の外壁の下に便所の汲み取り穴が在り、薄い石の蓋がしてある。

石の蓋が動き、穴の中から糞まみれの武雄が這い出て来る。

番犬が気配を察して、鎖をガチャガチャ言わせて犬小屋の外に出ようとする。

武雄は、一目散に河原に向かって走る。

番犬が吠えるが、吠え声で目覚めた者は無く、飯場は静まりかえっている。

○尻別川河原 夜中

武雄が河原を走って来て、川に飛び込む。

武雄は急流に流されながら、懸命に川下に向かって泳ぐ。

○尻別川下流 早朝

空が白み始めている。

川幅が広くなり、流れが緩やかになった尻別川を、武雄が流されていく。

武雄は疲れ果て、泳いでいるというより、ただ浮いて流されている状況。

武雄は、浅瀬に打ち上げられるが、寒さと疲労で、すぐに立ち上がれない。

武雄は、這うように、岸辺の草叢に登る。

草叢の向こうは一面畑が広がり、畑の先に一軒の農家が見える。

農家から、農夫の夫婦が馬を引いて畑作業に出かける姿が見える。

○農家 外 朝

禪一つの姿の武雄が、よろよろと農家にやって来る。

武雄は、農家の中を窺って、中に誰

もいないのを確かめると、隣の馬小屋に入る。

○農家 馬小屋 中

馬小屋の奥には、敷き藁が積んである。

武雄が来て、敷き藁の山の中に潜り込み、外から見えぬように、藁の奥に隠れる。

○大五郎の店 外

店の前に『丸通』の旗を立てた荷馬車が止まっていて、人夫が店の中から荷物を運び出しては、荷馬車に積んでいる。

荷物は、千代子の嫁入り道具（箆笥

や長持ち、行李等)

伍助が、店に何度も出入りして、人夫に指示をしている。

最後に、荷馬車の荷物に紅白の布が架けられて、荷馬車は出て行く。

伍助が汗を拭きながら、荷馬車を見送る。

○大五郎の家 千代子の部屋

千代子が窓辺に腰掛けて、函館山をぼおっと眺めている。

八重が入って来て、千代子に声をかける。

八重「今荷物が出ましたよ」

千代子「・・・」

八重「婚礼は、来週ですよ。しっかりなさい」

千代子「・・・」

八重「修二郎さんがそんなに嫌いなのかい」
千代子「修二郎さんは、いい方だわ。でも

結婚なんて、まだしたくない。小樽もいや、函館もいや、東京に帰りたいたい・・・」

千代子は涙ぐむ。

八重は、返す言葉が無く部屋を出て行く。

○馬小屋 中

敷き藁の山の中で眠っている武雄の鼻先に、サーベルの先が突きつけられる。

武雄は驚いて目を覚まし、飛び起きる。

巡査がサーベルを突きつけて怒鳴る。

巡查 A 「手を上げて、おとなしく出て来い」

武雄は両手を上げて立ち上がる。

農夫が、外から恐る恐る中を覗いている。

巡查 A 「おまえは、たこだろ。どこの飯場

から逃げて来た」

武雄 「俺は、東京帝大の学生だ」

巡查 A 「ほざくな。・・・ゆつくり表に出ろ」

武雄は、背中を巡查にサーベルで突かれながら馬小屋を出る。

○警察派出所 取り調べ室

手錠をかけられた武雄が、床に座らされている。

巡查 A が武雄にサーベルを突きつけて尋問し、巡查 B が奥で調書を書い

ている。

巡查 A 「どこの飯場に居たんだ」

武雄 「池田組だ。俺は東京帝大の学生で、名前は沢村武雄。大学に問い合わせてもらえば判る」

巡查 A 「借金が有るんだろ。働いて返すという証文が池田組にあるんだろうが」

武雄 「東京で騙されて連れて来られたんだ」

巡查 A 「借金返済の約束で働いてたのに、逃げだしゃ、貴様はりっぱな詐欺罪だ」

武雄 「騙されて書いた証文だ」

巡查 A 「証文が有るなら詐欺罪だ。池田組に引き渡すから、文句は池田組に言え」

武雄 「引き渡されたら俺は殺される。飯場で何人も殺されるのを見てきたんだ。殺人罪で飯場のやつらを捕まえてくれ」

巡査は薄笑いをしながら。

巡査 A 「飯場は何度も見回ってるが、死体を見た事も無ければ、そんな話を聞いたことも無い。まあ、逃げて熊に食われたたこや、戻って来ないたこの話は良く聞くな」

武雄 「引き渡すのだけはやめてくれ。頼む、助けてくれ」

巡査 A 「おい、留置場にぶち込んどけ」

調書を書いていた巡査 B が立ち上がり、武雄の腰縄を引き立てて、武雄を奥に連れて行く。

武雄は、引き立てられながら怒鳴る。
武雄 「頼む、引き渡すのだけはやめてくれ」

○警察派出所 外

権三が馬に乗って来て、派出所の前で馬を下り、馬を繋ぐ。

権三は、鞍に付けていたロープを外し、ロープを持って派出所に入って行く。

○警察派出所 中

巡査 A と巡査 B が、煙草を吹かしながら将棋をさしている。

権三が入って来て。

権三 「池田組だが、たこを引き取りに来た」

権三は、巡査 A に封筒を渡す。

巡査 A は、封筒の中の十円札を確かめて、薄笑いしながら巡査 B に向かって顎をしゃくる。

巡査 B は立ち上がって奥の部屋に行

き、手錠をかけられた武雄を連れて来る。

「巡查B「おい、お迎えだ。さっさと出て来い」

権三は、武雄を見てにやにや笑い、

武雄は権三を睨みつける。

権三は、ロープで武雄の手首を縛る。

巡查Bが、武雄の手首がロープで縛られたのを確認して手錠を外す。

武雄は、権三に体当たりして逃げようとするが、巡查Bに足を払われて転倒する。

武雄の体当たりで転んだ権三が立ち上がり、武雄の腹を蹴り上げる。

武雄は呻いて床を転がる。

巡查Aと巡查Bが武雄を引き起こし、

権三は、ロープで武雄を引いて外に

出る。

武雄は、腹を押さえてよろよろと外に引き出される。

○警察派出所 外

権三は、武雄を引くロープを鞍に結び、馬に乗って歩きます。

武雄は、馬にロープで引かれてよろよろと歩いて行く。

権三は、徐々に馬の速度を速める。

武雄は、小走りで付いて行こうとするが、躓き倒れる。

倒れた武雄は、手首を縛られたロープで、地面を引きずられて行く。

○原野の中の道

武雄が、手首を縛られたロープで、地面を引きずられて行く。

道は大きく曲がっていて、曲がり角の道端に大きな石がある。

武雄を引くロープが石に挟まり、権三の馬が石に繋がれた形で止まる。

権三は馬から下りて来て、石に挟まったロープを外そうと屈み込む。

その時、武雄が立ち上がり、権三の背後から権三に組み付き、権三の首にロープを巻きつけて締め上げる。

権三は驚き、首のロープを外そうともがくが、外れない。

権三は、懐に持っていた拳銃を抜いて、背中に組み付く武雄の腹めがけて撃つ。

銃声が原野に轟く。

武雄の背を銃弾が貫通し、血飛沫が飛ぶ。

馬が銃声に驚いて走り出す。

権三の首に巻かれたロープが、馬に引かれて締め、権三が絶命する。

馬が走り、馬の引くロープに権三と武雄が重なって引きずられて行く。

馬が止まる。

道端に、権三とその背に組み付いた武雄が重なって横たわり、二人共に動かない。

静寂。

○函館駅ホーム

小樽行き列車が止まっています、大

五郎、八重、千代子の三人が列車に乗り込もうとしている。

カネと伍助が見送りに来ている。

俯いている千代子に、カネが声をかける。

カネ「千代さん、幸せになってくださいね」

千代子「カネさん。長い間有難う」

列車の発車の案内がホームに流れる。

八重「それじゃ、行つて来ます」

大五郎、八重、千代子が列車に乗り込む。

汽笛が鳴つて、列車が動き出す。

列車に向かって手を振る、伍助とカネ。

一等車両に大五郎、八重、千代子が乗っている。

大五郎は弁当を食べて酒を飲んでい

る。

大五郎「小樽まで、まだ半日はかかる。腹

ごしらえをして、寝て行きなさい」

八重「千代子、お弁当食べるかい」

千代子「まだいらぬ」

八重も弁当を食べ始める。

千代子は窓外をじっと見ている。

○列車の中

窓外の景色（内浦湾の海岸線）。

大五郎はぐっすり眠っている。

八重も、うとうとしている。

千代子は、じっと窓外を見ている。

○列車の中

○列車の中

窓外の景色（森の中）。

車掌が倶知安駅への到着を告げて通路を歩いて行く。

車掌「間もなく倶知安駅に到着します」

大五郎はぐっすり眠っている。

千代子が立って、通路に出ようとす
る。

八重「どこに行くの」

千代子「ご不浄」

千代子は、通路を歩いて行く。

○倶知安駅（遠景）

列車が倶知安駅に入ってくる。

列車が停車し、客が降りてくる。

弁当売りが列車の窓に声をかけなが

らホームを歩いて行く。

○列車の中

八重が、なかなか戻って来ない千代子を心配して、デッキの方を気にしている。

弁当売りが窓外を通り、八重は、弁当売りの声でふと窓外を見る。

改札口の近くにいる千代子が見える。

八重が驚いて、前の座席で眠っている大五郎を揺り起こす。

八重「あなた、千代子が・・・」

大五郎、目を覚まし、目を擦りながら。

大五郎「えっ、どうした」

八重は、窓外に見える千代子を指さして。

八重「千代子が、降りてしまったんですよ」

大五郎「えっ、どこだ、この駅は」

汽笛が鳴り、列車がガクンと動き出す。

大五郎は、慌ててデッキに向かつて走る。

八重は、必死に窓を開けようとする。列車は速度を増し、駅を離れて行く。

○俱知安駅 外

俱知安駅の改札から千代子が出て来る。

千代子は、辺りを見回し、駅の外れに荷馬車が数台止まっているのを見つけて、その荷馬車溜まりに歩いて行く。

○荷馬車溜まり

荷馬車が数台いて、客待ちの馭者達が煙草を吹かしながら、千代子を見ている。

千代子は、一番年配の馭者に声をかける。

千代子「京極軽便線の建設工事現場わかりますか。池田組の飯場に行きたいんですが」

馭者は千代子をじろっと見て怪訝な顔をし、千代子の相手をしない。

千代子は、懐から五円札を出して見せる。

千代子「これでお願ひできませんか」

馭者は、五円札を見てにやりと笑う。

馭者「お嬢さん、乗せない事もないが、飯

場なんかに行つてどうするんだい」

千代子「人を探してるんです」

馭者「飯場は熊が出るような山の中だ。お

嬢さんが一人で行くような所じゃないよ。

馬車の馭者だつて、いつ狼になるかわか

つたもんじゃねえ。まあ、俺みたいなさ

ジイは確かに安心だがね。まあ、乗んな

さい」

千代子が乗り、荷馬車は走り出す。

○尻別川河岸の道（遠景）

尻別川の両岸は紅葉の盛りである。

尻別川に沿つた道を、千代子に乗せ

た荷馬車が行く。

○荷馬車

荷馬車が止まり、馭者が尻別川の河

原の方を指さして千代子に言う。

馭者「ここから河原に下りて暫く行くと、

左手の丘の上に飯場がある」

千代子は、馭者に五円札を渡して、

荷馬車から降りる。

馭者「帰りも乗るんだろ、待つててやるよ」

千代子は馭者に軽く頭を下げて、細

い道を河原に下りて行く。

○飯場 外

飯場の周りには人影が無い。

河原から千代子が上がって来る。

千代子は、飯場の前で少し躊躇して

立ち止まっているが、意を決して飯

場の重い扉を開ける。

○飯場 中

千代子が入つて来る。

千代子「誰かいませんか」

帳場係が奥から出て来て怪訝な顔で

言う。

帳場係「何の用だ」

千代子「ここに、沢村武雄という学生はい

ませんか」

帳場係「ここは、女子供の来る所じゃねえ。

とつとと帰れ」

親方が奥から出て来る。

親方「あんた誰だ」

千代子「平沼大五郎の娘で、池田修二郎の

許嫁です」

親方、帳場係は少し驚いて顔を見合

わせるが、すぐにやにやし始める。

親方「あんたがここに来る事を、大五郎は

知ってんのかい」

千代子は黙って、親方と帳場係を睨

む。

帳場係「沢村武雄という奴が、ここに居た

らどうするんだい」

千代子「買い取つて連れて帰ります」

親方と帳場係が顔を見合わせ大笑い

する。

親方「さすが大五郎の娘だ。買い取るとよ」

奥で炊事係と康介が、親方と千代子

のやりとりを聞いている。

親方「確かに沢村武雄はここに居たよ。だ

がな、十日前に逃げ出しやがった。捕ま

えて殺してやろうと思つてたが、あんた

が買つてくれるんなら、殺さずに売つて

やろう」

帳場係「いくらで売ります」

帳場係と親方は笑いが止まらない。

千代子「武雄さんは、生きてるんですね」

親方は、険しい顔になって言う。

親方「生きて捕まえたらの話だ」

康介が、水汲み桶を天秤で担いで奥から出て来る。

康介「水組みに行つて来ます」

親方も帳場係も康介には見向きもしない。

康介は、天秤を担いで外に出て行く。

親方「さあお嬢さん、暗くならねえうちに

早く帰りな。ここは熊も出る。・・・帰つ

たら大五郎に良く言つときな。逃げ出す

ような奴ばかり連れてくんなってな」

親方は笑いながら奥に引つ込む。

帳場係「さあ、帰つた帰つた」

帳場係が千代子を押し出し、扉をしめる。

○飯場 外

千代子が扉の前に茫然と立っている。

草叢から康介が、千代子を手招きする。

千代子は康介に気付き、康介に歩み寄る。

康介は、周りを気にしながら、千代子を河原に連れて行く。

○河原の草叢

康介と千代子が向かい合っている。

康介「来るのが遅すぎた」

千代子「貴方は」

康介「僕は沢村の学友です。沢村と一緒に

東京から連れて来られました」

千代子「本当に、武雄さんはここから逃げ

たんですか」

康介「沢村は十日前に逃げました。・・・し

かし、五日前に遺体で戻って来ました」

千代子「えっ・・・」

康介「沢村を追って行った男と刺し違えた

ようです。馬に乗せられて戻ってきまし

た。ここでは、逃げて捕まれば、すぐに

殺される。そして、そのまま工事現場に

埋められてしまうんです」

千代子「武雄さんが死んだ。・・・武雄さんは、

どこ、どこに・・・」

千代子は、康介の両肩を掴んで揺す
る。

康介「この先の工事現場です。今も大勢の
たこが働かされてる」

千代子は、康介を突き飛ばすように
して、河原の上流に向かって走り出
す。

康介は、千代子を追おうとするが、
途中でやめて、千代子の後姿を見送
る。

○吊り橋

尻別川に架けられた吊り橋を、千代
子が渡つて来る。

吊り橋からは、上流に工事現場が見
える。

工事現場では、大勢のたこ達がモッコを担いで土を運んでいる。

棒頭達が、たこ達の周りで見張り、時々

たこ達に掛け声をかける。それに応えるたこ達の『おうっ』という声が響く。

千代子は、吊り橋の真ん中で、工事現場をじっと見つめている。

千代子独白「なぜ、・・・なぜなの」

千代子は崩れる様に頭から川に飛び込む。

尻別川に水しぶきが上がる。

○尻別川

尻別川の両岸は紅葉の盛りである。

千代子が、うつぶせの姿で流されていく。

千代子の着物が川面に広がり、河岸の紅葉が川面に映っているかのようである。

○千代子と武雄の写真

ハルの家の庭で写した千代子と武雄の写真が、川の水の中にある。

写真が徐々にセピア色に変色していく。

○大正八年十一月十五日の新聞記事

『倶知安—京極』京極軽便線開業の見出し。

ナレーション「大正八年十一月十五日、倶

知安、京極間の鉄道、京極軽便線が開業
しました」

海道の鉄道建設に携わった『たこ』の存
在も、人々の記憶から消えていきます」

○昭和十五年十二月十五日の新聞記事

終わり

『倶知安―伊達紋別』胆振縦貫鉄道開
業の見出し。

ナレーション「昭和十五年十二月十五日、
京極、伊達紋別間の開通で、京極軽便線
は胆振縦貫鉄道として、倶知安、伊達紋
別間で新しく開業しました」

○昭和六十一年十一月一日の新聞記事

胆振線廃線の見出し。

ナレーション「昭和六十一年十一月一日、
倶知安、伊達紋別間の胆振線が廃線とな
りました。……時代は移り変わり、北

本電子書籍は、2013年12月6日発行の『第19回函館港イルミネーション映画祭2013 第17回シナリオ大賞・受賞作シナリオ集』より、準グランプリ受賞作品を抜粋したものです。

シナリオ集のお求めや、作品の映像化につきましては、本映画祭函館事務局までお問い合わせください。

第19回函館港イルミネーション映画祭2013
第17回シナリオ大賞 準グランプリ受賞作品

たこ

作：太田 野歩

※本作品の無許可掲載・転用を禁止します

2014年4月1日 電子書籍版発行

発行：函館港イルミネーション映画祭実行委員会 函館事務局

〒040-0055 函館市末広町4番19号（函館市地域交流まちづくりセンター内）

電話 0138-22-1037 <http://hakodate-illumina.com/>

制作：株式会社新函館ライブラリ

〒040-0051 函館市弁天町4番8号

電話 0138-84-1620 <http://www.nhakodate.com/>
